

霧島市廻城跡について

黒川 忠広

1 はじめに

霧島市福山町に所在する廻城跡は、廻氏の居城で、島津忠将との関わりで度々取り上げられる城跡である。現在城跡は、二之丸横に駐車場が整備され、鹿児島湾と桜島を見渡せる場所として、特に桜島山頂に沈む夕日を「ダイヤモンド桜島」と称し、このビュースポットとして来訪者が絶えない。

廻城跡は、城の構造が良好に残存している。今回は、城の基礎情報を整理することと、縄張図を作成して城の構造を明らかにすることを目的とした。

2 先行研究

廻城跡は、島津氏の研究などで島津忠将が戦死した廻城の合戦の中で取り上げられてきた。中世山城としての研究は、地元郷土誌が刊行され、「仁田尾(廻)城は北西之方に大手口、用水は無く御前水を樋で導水している。前方南西に二十間の高台、後方南東に大谷あり、本丸の広さ五反、二の丸の広さ一町八反、二の丸北東二町程の所に用水があった」と城の概要が示されたことが始まりと言える(福山町1978)。

その翌年には、日本城郭体系において紹介される。これによると、「三面は直立状の急峻な懸崖となり、東南方のみ牧之原台地とつながっているが、その台地基部には掘割が設けられ、城域を外界から遮断している」と構造の特徴が示された(三木1979)。

旧福山町(現在の霧島市)による公園整備が計画された際には、福山町教育委員会の依頼を受けた鹿児島県教育委員会文化課が確認調査を実施したという記録が確認出来る。昭和57(1982)年2月15日から23日の間に実施され、取り付け道路予定地を対象に調査が実施されたようである。

その後、大雨による本丸土塁の崩落によって遺物が散乱したことをきっかけとして発掘調査が実施された。その結果、13世紀、14～15世紀、18世紀の3つの時期の遺物が出土し、「一括埋蔵遺物の内容は、伝世の武具、尊崇の対象である鏡、当時流通していた通貨」として、「一括遺物が廻氏の手によって永禄4年5月14日直前に埋蔵されたと想定」している(河口・本田1984)。

鹿児島県教育委員会が実施した中世城館調査では、松下栄盛氏が「庄内平野の喉元」としての位置づけを

示し(松下1984)、歴史の道調査では、事業の特性から街道との関係に視点を置いて紹介された。福山町を担当した谷山二夫氏によって、「高岡筋を海岸から中之茶屋へ登り、上之茶屋へ通ずる坂道の途中南側の小高い丘が馬立塁跡である。上之茶屋集落の県道から旧街道を100米程登った馬立坂北側の丘に島津忠将の墓がある。この墓のある丘の北方に谷を隔てて仁田尾城址がある。別名を廻城とも言う」と街道と関連する塁との位置関係を述べた(谷山1994)。地理的な位置付けは、新名一仁氏も、「廻城は、大隅国府から庄内(都城盆地)、そして大隅中部や志布志へと向かう街道の入口」である点を踏まえ、永禄4年時点において「島津本宗家による飢肥への支援ルート」であると、この地の重要性について述べている(新名2017)。

慶長4(1599)年に伊集院忠棟が伏見で殺害されたことに端を発した庄内の乱においては、島津義久の命で山田利安が早々に配置につき街道監視を強化していることから、庄内と大隅・薩摩を結ぶ要所であったと言えよう(註1)。

鹿児島県考古学会では、中世山城を特集し、その中で、廻城跡についても調査担当者であった河口氏によって発掘調査の成果が改めて紹介された(河口1994)。

3 史料紹介

ここでは、先行研究において取り上げられている史料について見ていきたい。廻城の城主である廻氏については、『三国名勝図会』や『地理纂考』にその出自が記されている。

【史料1】

廻氏ハ源三位頼政の後胤なり、其家譜を按するに、治承四年、頼政の孫肥前守宗綱へ大隅國廻村を賜り、其子孫承襲し、地名を以て氏とせり、頼政高倉宮を勧めて兵を起し、平氏の一族知盛・通盛等と宇治の平等院に戦ひ、其子伊豆守仲綱と共に敗死す、仲綱三子あり、長を肥前守宗綱、次子を駿河守廣綱、三子を左衛門尉有綱といふ、頼政・仲綱敗死の時、三子皆幼少して醍醐の邊に潜り匿るといへとも、遂に搜し出され、流罪に處すべしとて廻村を賜り、世々此地を領し、其家繁榮して仁田尾城に居れり、

このようにあり、永禄4（1561）年の合戦時の当主である廻兵部少輔久元についても続けて記されている。

十五代の孫兵部少輔久元盲目にて、其子次郎四郎頼貞幼弱なりしに

ほぼ同様の記事として『本藩人物誌』で久元は、

【史料2】

兵庫頭光清子ナリ隅州廻之城主ナリ永禄年中久元盲目ニ罷成其子次郎四郎頼貞「初宮房丸」幼稚ニテ候ヲ肝付省鈞攻亡ス

『地理纂考』との違いは、「盲目ニ罷成」というくだりである。罷成ということから、目を患って視力が落ちたか、或いは失明してしまった可能性が考えられる。これをきっかけとして、肝付兼統が廻城を急襲することとなる。この合戦こそが、永禄4年の島津忠将が戦死した一連の合戦であり、その顛末は城の構造と呼称、位置関係についても記されている。

【史料3】

永禄四年五月十四日仁田尾城を襲ひ取りしを、同年六月、島津貴久・島津義久父子大兵を督し城を攻む、島津右馬忠将是に従ふ、貴久父子ハ大塚に陣し、忠将ハ馬立に屯し、大塚・馬立共に地名、遊軍を竹原山に置いて敵に備ふ、兼續自ら當城に據る、城の野頸に市成・恒吉の通路あり、関を設て堅く是を守り、又伊地知周防重興・祢寢右近重長兵を率ひ救ひ来て城に入る、七月十二日、城兵急に竹原山を襲ふ、忠将馳せ往て是を援ふ、半途にして敵の伏兵起りて是を圍む、忠将奮戦すといへとも衆寡敵せず、従兵以下五十七人と共に戦死す、貴久父子大に憤り、諸軍を勵し奮戦す、其勢ひ當るへからず、兼續・重興・重長等敗北して城に入ることあたはず、恒吉を指て遁れ奔り、終に仁田尾を抜く、斬獲甚多し、此城溪谷岡巒相遶れり、大手口・搦手口・二之丸・本丸・内城の名分れて濠塹の跡残れり、二の丸の下東南の方ハ野頸にて、大塚・馬立・竹原山等の壘に續き二重の堀切あり、

竹原山側に二之丸があり、堀切が残存していることから、現在の駐車場側が二の丸に比定できる。大塚壘については、

福山旧牧場苑の内にして第1の高岡なり、仁田尾城とハ大谷を隔て相對す、永禄四年島津貴久父子陣營の跡にて、事は仁田尾城の條に詳なり、大塚を或ハ大牟禮といふ、後また惣陣とも呼ぶ

大塚壘は現在の惣陣が丘を指すことがわかる。位置関係を押さえると、第1図のようになる。竹原山の壘については、

仁田尾城の野頸に続きたり、

とある。この野首は、二之丸の東南に位置し、現在松下清兵衛の碑が残されている。これらとほぼ同じ内容は、三国名勝図会にも記されている。

最後に、三木氏は、史料3にも記載されているような、島津貴久が弟の戦死を受けて肝付軍を退けたとされていることに対し、「忠将戦死のあと島津軍は廻城攻略を中止して鹿児島へ引き上げた」点と、「天正2年初めまでは廻城は肝付氏の掌握下」にあった点を指摘している（三木1979）。三木氏が指摘する永禄4（1561）年合戦後の動向がわかる史料を紹介しておく。

【史料4】

肝付勢猛勢ナレハ馬立ノ陣ヲモ切崩シ、其威勢ニ押掛り、右馬頭ヲ奉討、典厩ノ者トモ川上・町田・酒勾等ヲ始トシテ宗徒ノ者トモ廿餘人ソ討レタリ、御内ノ人々ハ氣迫テソ見ヘニケル、其俣肝付勢廻ノ城ニ馳籠リ、省鈞入道ヲ守護シケル、省鈞右馬頭ノ打レ玉ヒタリト聞大キニ驚キ、弓箭ハ一端ノコト、終ニハ和平ノ曖トモ成ヘシ、典厩打レ玉フコト永キ遺恨ノ種子トナルヘシ、其典厩ト兄弟ノ契ヲ致シ、忠将ノ姉兼續カ室ナリ御懇志ノ至浅カラス、心ナラスモ相隔リ、弓箭ノ習トハ云ナカラ、彼ヲ討申候コト無面目次第ナリト、袖ヲ顔ニ押當テ涙ヲ流サレケル、自夫肝付モ不進、守護方ヨリモ肝付ヲ急度難退治思ヒ玉ヘハ、貴久御父子宗徒ノ人々ニ談合有テ、先ツ此節ハ御開陣アルヘシトテ、和平ノ曖ヲナシ御陣ヲ引玉ヘハ、省鈞不斜悦ヒ、廻ノ城ニハ番手ヲ召置如肝付引レケル

4 縄張り図の紹介と踏査の記録

これまでに2つの図面が紹介されている。1つは、田野辺道宏氏が昭和40年頃に作成したとされる縄張り図である。これは城館カードに残されており、これを浄書したものが『鹿児島県の中世城館跡』に掲載されている（第2図1）。もう1つは『鹿児島考古』第18号の調査報告にある図である（第2図2）。これは、河口氏等も述べているように、「廻城公園現況平面図」を浄書したものであった（河口・本田1984）。

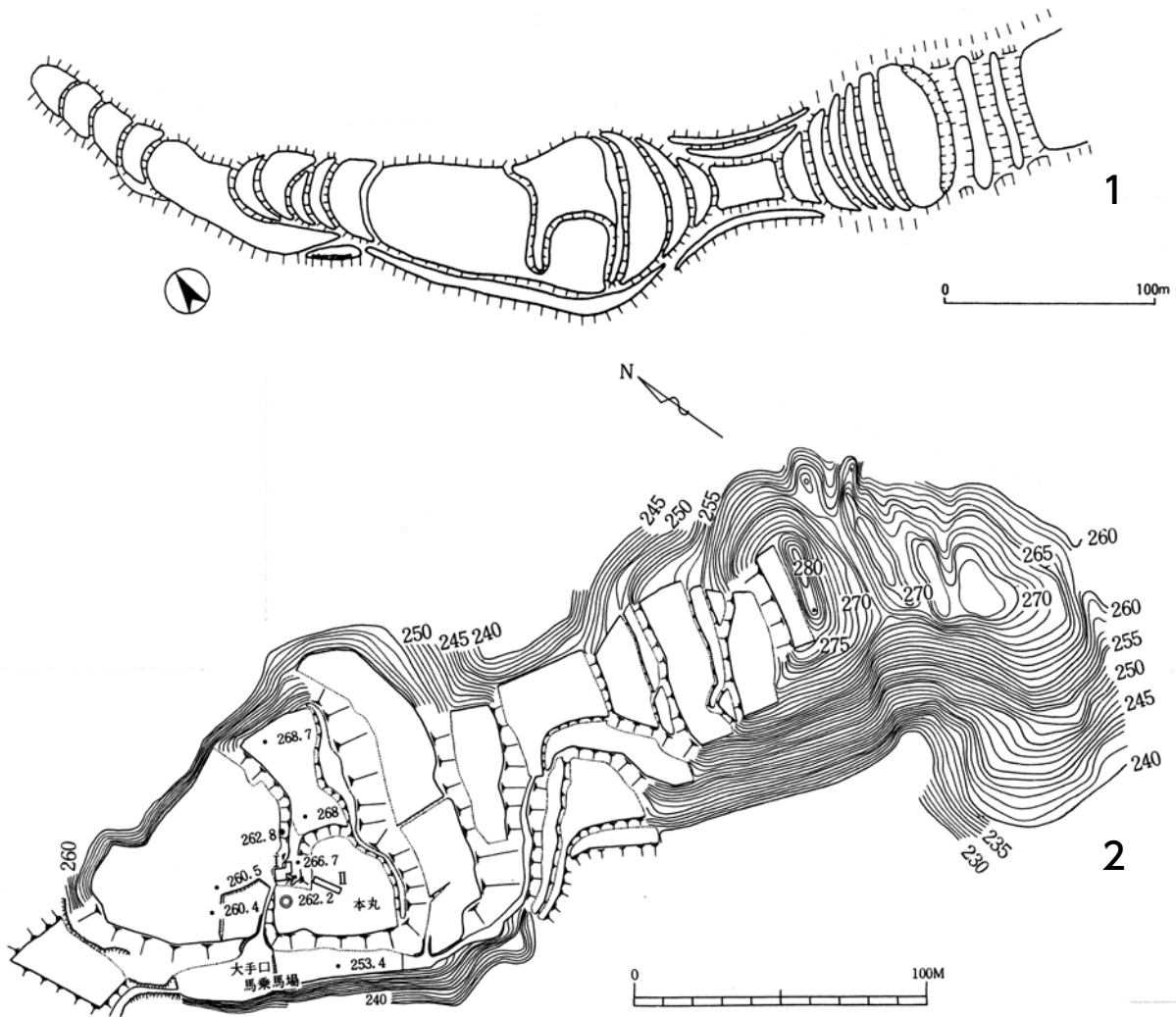
今回、これらを参考に現地踏査を実施して作成したものが、第3図である。踏査は、令和8年1月から2月に実施した。駐車場入口の植栽横から二之丸跡に入った関係上、順路に沿って通し番号を付した。

進入口は、未設置の側溝が積まれている横から山に入る。右手北東側は急峻な崖で左手南西側に土壘と堀切が交互に見える。三連堀切と呼べるものである。堀切1は西側に向かって登り、最も高い地点では、土壘1との比高差は少なくなる。土壘1は北側に2段小さな平場があり、南側にも、平場が確認出来た。

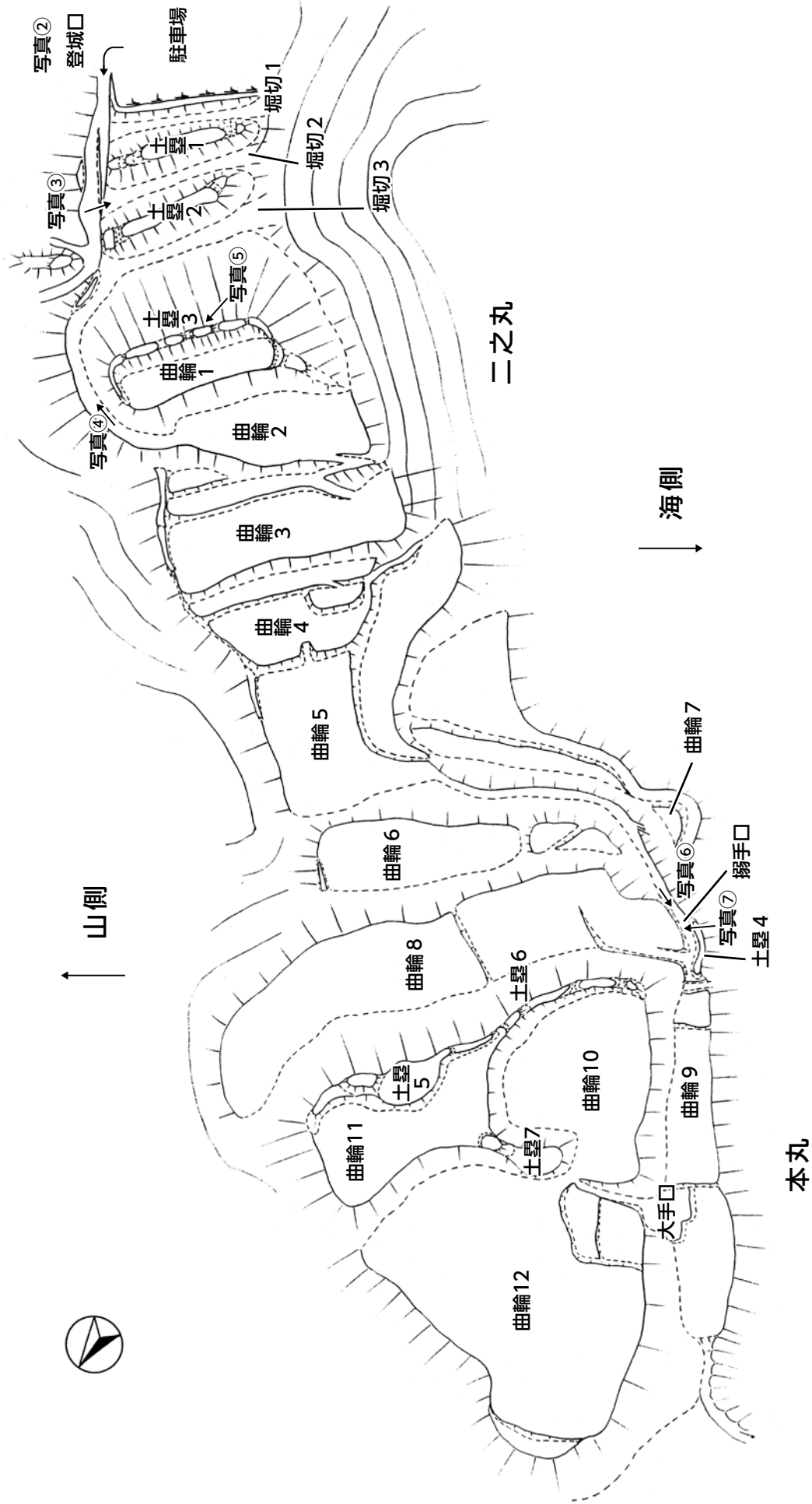
堀切2は、北東側の堀底に不自然な窪地が2箇所連続する。土壘2は北側に平場があり、南側はやや堀切2寄りに平場がある。堀切3の北側にも堀切2で見られた不自然な窪地がある。これらは、後世のものだと判



第1図 廻城跡位置図



第2図 廻城跡縄張り図・測量図



第3図 廻城跡縄張り図

断して図化していない。また、三連堀切北東側の通路も、土塁等への不自然な立切状況から、後世のものの可能性を考えた。

さて、二之丸曲輪を北側に回り込むように道が続く。道の右手東側は崖となり、左手西側は切岸となる。道が回り込むと、曲輪2との接続部分は曲輪1側で裾が広がる。曲輪2から曲輪1へは、海に面する西側から登る。曲輪1は、長方形プランで、東側には土塁3が逆コの字状にそびえる。土塁3は、堀切3のある東側全面に築かれているが、切岸のある北側は曲輪1の短軸先端までではなく、南側はさらに短い。

曲輪2から3へは、葛折りに下る。曲輪3の上下に細長い平坦面があるが、藪が深くよくわからない。曲輪4は台形状で曲輪5側の中央付近に直線的な入口が見られる。曲輪5は、本丸と二之丸の中間に位置した谷部であるが平坦で広い。曲輪4側の北東端部が土塁状に高まる。

曲輪6は、曲輪8北側の端部を小さく土塁状に残す。山側と海側の東西方向に長く、西側は連続して2段高くなるが、不定形ではっきりとしない。その下には曲輪5から延びる道が斜面に沿う。この道から下に台地突端部を三角形に造成した曲輪7があり、その下には曲輪7に沿うように道が下へ続く。これより下方にも平坦面が複数あるが、ここまでを城域として捉えた。

搦手口とした場所は（河口・本田1984）、幅1.8m程度岩盤を切り下げており、側面にも直線的に加工した痕跡が明瞭に残されている。門の構造を示す遺構と思われる。

この搦手口から曲輪9が直線的に続くが、右に曲がり曲輪8に登る。段差によって大きく3つに分かれているが、1つ1つの段は低い。曲輪の幅は20m弱で、100m程北東方向に延びて、くの字に曲がって収束する。土塁状の痕跡等はないが、人頭大の礫が曲輪11側に集積している。

搦手口に戻って曲輪9を目指す。左手海側の土塁4（門と一体を成す構造か）を過ぎると、すぐに西側崖に向かって溝状に凹む。曲輪9は、馬乗馬場と位置づけられている曲輪で、80m程直線的に続く。幅は、平均して10m程ある。右手北側に大手口があり、曲輪12手前は略方形に2段の平坦面がある。

曲輪12は、曲輪10とほぼ同じ高さで平坦面を有し、曲輪11から延びる土塁7の先端部下で両曲輪が接する。土塁7の先端部には祠があり、周辺は河口氏等によって発掘調査が行われ、鎧・太刀・鏡・古銭などが出土している。構造については、地層の堆積状況から、「土塁状に削り残して造成」されていると結論づけられている（河口・本田1984）。曲輪12の北側先端は一段低く三日月状を呈しており、帯曲輪になると思われる。曲輪10は凸形の形状を呈し、曲輪11から延びる土塁6と土塁7によって防御されている形を成す。本丸に比定されている曲輪である。曲輪11は鼓形を呈し、西側に延びる土塁7の曲輪11手前は藪ではっきりしないが、高まりがある。

土塁5は、曲輪11の東南側全面に延び、曲輪11と10

の境で一度収束しているようで、ここを土塁5の終焉とした。再び土塁6として曲輪10の凸部右手の東南側から搦手口の方向へ3段程度の段を有して延びる。拳程度の礫が集中する状況が部分的に認められながら先端に向かって低くなる。

馬乗馬場と言われている曲輪9から先は、一段大きく落差があり、その後細く道が続く。さらに先まで平坦面が連続しているが、曲輪12の北側帯曲輪から延びる斜面までを城域として捉えた。田野辺氏の縄張り図では、これらの平坦面も曲輪として捉え、内城の比定も行っているが、筆者にはわからなかった。今後の検討課題の1つである。

以上が踏査中の所見である。踏査して、各曲輪西側の海に面する一辺に土塁等の防御機能をほとんど設けていないことが印象的であった。元々の地形が急峻で、不必要だったとも思われるが、存城時は、日州街道を眼下に、その先に鹿児島湾と向島（現在の桜島）を眺望できる廻城の立地は、格別だったことであろう。

余談であるが、踏査中には陶磁器などの散布も確認している。現地に留めているが、景德鎮産の青花皿と思われる。これまでの調査で青花は出土していないため、存城期間や各曲輪の関係などを把握する上で貴重な資料かと思われる。

5 おわりに

廻城跡の所在する霧島市福山町には、廻城の合戦で戦死した島津忠将の供養塔がある。江戸時代、島津忠将は、垂水島津家の初代と位置づけられている。その事から、供養塔の傍らには、江戸時代に垂水の人々が建立した燈籠などが現存している。7代久治の頃の延宝5（1677）年や、11代貴品の頃の天明3（1783）年の紀年名のある石造物などは、これら顕彰活動の来歴を示す。一方で、歴史史料として、鹿児島県実施の中世城館跡調査時点の昭和50年代まで、島津草子氏所蔵の『廻御戦場絵図』が存在していた（松下1984）ことがわかっているが、今回この所在を確認することが出来なかった。松下氏によると、元禄年間の史料であるとされており、引き続き所在把握に努めていきたい。

今回は、駐車場横で踏査が比較的容易な二之丸跡から城内に入り紹介してきた。今後は、本来の登城ルート of 検証や、館の推定なども含め、より広い視点で紹介できるように努めていきたい。加えて、霧島市内には、数多くの中世山城がある。引き続き史料の整理と踏査を行い、その記録を紹介していきたい。

踏査にあたって、多くのご教示を得た。末筆ながら感謝申し上げたい。

阿萬光哉 有川孝行 上田 耕 北園和代 小水流一樹
下鶴 弘 高嶺光佑 西野元勝 堀之内清子 森えりこ

【註】

1) 樺山紹剣自記の慶長4年己亥3月の記事【史料5】に記されている。なお、庄内の乱については、桐野作人氏の(桐野2025)が詳しい。

【史料5】

慶長四年己亥三月、龍伯様京都より御下向、幸侃於伏見生害、此沙汰有別紙、然者、庄内諸外城取構弓箭之也、幸侃子供之志理也、然者、富隈ニ龍伯様御座候間、國中浮雲事なし、去ハ庄内境にハ先々其用心可有とて、上井清水之浦ニ渡瀬と云に柵を取、肥後名子之者を被差置候、廻ニ山田利安、市成江寺山殿、大崎ニハ桂殿、志ふし江者権左衛門、

【引用・参考文献】

河口貞徳1994「廻城」『鹿兒島考古』第28号 鹿兒島県考古学会
 河口貞徳・本田道輝1984「廻城－落城と出土遺物－」『鹿兒島考古』第18号 鹿兒島県考古学会
 桐野作人2025「庄内の乱」『歴史群像』No.190 株式会社ワン・パブリッシング
 鹿兒島県教育委員会1987『鹿兒島県の中世城館跡』鹿兒島県埋蔵文化財発掘調査報告書(43)
 鹿兒島県立図書館1973『本藩人物誌』鹿兒島県史料集第13集

高木三志1993「廻城跡」『さつまの山城』54 鹿兒島新報 1993(平成5)年8月30日14面
 谷山二夫1994「仁田尾城跡」『大口筋・加久藤筋・日向筋』歴史の道調査報告書第二集 鹿兒島県教育委員会 垂水市教育委員会1985『垂水市史料集(六)』
 新名一仁2017『島津貴久』戎光祥出版
 松下栄盛1984「廻城跡(仁田尾城跡)」『鹿兒島県中世城館調査カード』鹿兒島県教育委員会
 三木靖1979「廻城」『日本城郭体系』第18巻 株式会社新人物往来社
 福山町1978『福山町郷土誌』福山町郷土誌編纂委員会
 青潮社1982『三国名勝図会』

【史料】

1 鹿兒島県2019『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 地誌備考六』
 2 鹿兒島県立図書館1973『本藩人物誌』鹿兒島県史料集13
 3 1に同じ
 4 『箕輪伊賀自記』鹿兒島県2019『鹿兒島県史料 旧記雑録拾遺 地誌備考六』収録
 5 鹿兒島県立図書館1996『樺山紹剣自記』鹿兒島県史料集 第35集 鹿兒島県史料集刊行会



写真① 国道220号からの順路



写真② 二之丸跡入口 (側溝が目印)



写真③ 堀切2 (入口から西を見る)



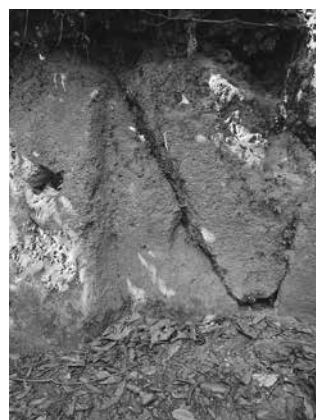
写真④ 曲輪1下の切岸と通路



写真⑤ 土塁3にある三角点



写真⑥ 搦手口 (二之丸側から見る)



写真⑦ 搦手口の加工痕



写真⑧ 青花皿の状況

イベント報告 1

第12回九州城郭研究大会

「南北朝期の合戦と城」

と き 令和7年11月29・30日

ところ 菊池市生涯学習センター

主 催 北部九州中近世城郭研究会

後 援 菊池市教育委員会

報 告 下鶴 弘

菊池武光銅像



昨年11月に熊本県菊池市で北部九州中近世城郭研究会主催の上記研究大会が開催された。下鶴が参加したので、ここにその概略を報告したい。

29日の菊池城跡見学会は鶴嶋氏の案内で、約30名の参加者であった。30日の研究会は約50名の出席者で盛況であった。大会資料は2500円で販売。

小柳会長のあいさつ文によれば、菊池市内には鎌倉時代から南北朝期にかけての菊池氏にまつわる遺跡や城跡が残され、その一部は「菊池氏遺跡」として国史跡に指定されたという。南朝方の九州における拠点地で、今回南北朝の城郭に焦点を当てることになった。しかしながら、研究会には南北朝期の城郭の研究実績はほぼなく、全国的傾向である。どうしても資料の残りがよい戦国期に焦点が当たりがちであると。

近年の発掘調査では、南北朝期の遺物が出土し、南北朝期の遺構も確認される遺跡城郭も増えてきている。そこで、今回は北部九州限定ながら、同時代の文書に記された城郭、現存する城郭、発掘調査で確認された城郭意向を一緒に検討することで何らかの手掛かりが得られないか、という観点からテーマを設定したと説明されている。

研究大会内容

1. 基調講演「南北朝期の合戦における城と陣」

佐賀大学教授 宮武正登氏

はじめに、南北朝期の城郭研究史を概略された。

□戦闘実態の変化と「城」「陣」

堀による通行遮断といった「線的」防衛から大手・搦手を意識した「面的」防衛に変化してきたという。

□構成要素の多様化

鎌倉期以前と南北朝期の城館の違いは、内部建築物の増加であるという。建武年間の内乱期の文

書によれば、「堀」「橋」「乱杭」「鹿垣」「矢倉」などの構造物が増えていくという。興味深いことに、宮武氏は薩摩碓山城の「水手矢倉」の例を出され、矢倉と木戸の併設に注目され、機能分化がみられると指摘する。

また、建武4年(1337)陸奥の相馬重胤が、「国中静謐のために屋形は城郭に構えた」という記事を紹介し、領地支配の観点から城郭の大きな画期であったと捉えている。

(□生活施設の登場、□城普請の源流は略す。)

□城の存在目的の変化

暦応4年(1341)4月4日、薩摩の伊作宗久道恵が谷山郡地頭の山田忠能に送った書簡に、「領内に城が一つも存在しなくては成り立たない」という一節を紹介し、城郭イメージの変化を指摘している。

2. 研究報告

以下の4名の報告と2名の紙上報告があったが、内容は省略する。いずれの報告も今後の南北朝期における城郭研究の基礎資料となる内容であった。

①山崎龍雄 「筑前国の南北朝期の合戦と城」

②阿南 亨 「中世肥後国菊池の城について」

③小柳和宏 「豊後における南北朝期の合戦と城」

④中山 圭 「南北朝期前後の遺物を出土する城跡」

*大会資料には二人の紙上報告があった。

○藤野正人 「南北朝期「宗像城」について」

○鶴嶋俊彦 「肥後国球磨郡における南北朝期の城」「肥後国南北朝期の山鹿・菊池郡の城と陣」

「肥後国南北朝内乱の概要」

3. パネルディスカッション

「北部九州における南北朝期の合戦と城」

パネリストには、宮武正登・山崎龍雄・阿南亨・小柳和宏・鶴嶋俊彦・藤野正人の各氏が登壇し、中山圭氏の司会で進められた。

会場風景



イベント報告2

お城EXPO2025 参加報告

「外国人の見た鹿児島 の群郭式城郭などを紹介！」

南九州城郭談話会員 上田 耕

「お城EXPO」は、2016年の開始以来、毎年12月に神奈川県横浜市のパシフィコ横浜ノースで開催されている、日本最大級のお城の祭典である。城郭文化の振興と発展、および城郭ファン同士の交流を目的としてスタートし、全国から自治体、専門家、そして多くの城ファンが集うイベントとして高い支持を得ている。

10回目の節目となった本年度は、お城を有する自治体や関連グッズを扱う企業・団体など、計129のブースが出展し、各種PR活動が活発に行われた。会場の1階から4階にかけては、研究者や専門家によるトークショーや講演が実施され、20日・21日の2日間で23,000人が来場し、過去最多のにぎわいとなった。

私は今回、公益財団法人日本城郭協会の新人学術委員として、「南九州の城を歩く ― 崖に驚く防御の工夫 ―」をテーマに60分のセミナーを担当した。南九州のシラス台地に築かれた主要な拠点城郭のうち、アルメイダやアルバレスが見た群郭式城跡を中心



に紹介したところ、会場には約110名が来場し、立ち見が出るほどの盛況であった。

その他の会場でも、小和田哲男日本城郭協会理事長、中井均滋賀県立大学名誉教授、宮武正登佐賀大学教授、歴史学者の平山優日本

城郭協会評議員、城郭ライターの萩原さちこ氏など、多くの専門家が登壇し、各プログラムが大いに盛り上がっていた。

2日目には、落語家でお城好きとして知

られる春風亭昇太氏と、加藤理文日本城郭協会常任理事による陣屋の魅力を語る特別企画も実施された。また、大河ドラマ「豊臣兄弟」で寧々役を務める浜辺みなみ氏のトークショーも行われ、会場はアイドルイベントさながらの熱気に包まれていた。

一方で、鹿児島県および宮崎県の観光関連ブースが出展していなかった点は残念であった。しかし、与論町の南勇輔氏が、昨年国指定となった与論グスクの紹介を文化庁ブース内で行い、観光誘致を兼ねたPR活動を展開していたことは心強い動きであった。

今後は、鹿児島県や各市町村の観光・文化関連機関にも積極的な参加を促し、県外の城郭愛好家に向けた情報発信をさらに強化していければと思う。



イベント報告3

「都城」築城650年記念 令和7年度歴史シンポジウム

「その城の名は、都城！」

～城が語る都城盆地の中世～

と き 令和8年1月18日(日)15時～17時30分

ところ ウェルネス交流プラザ2階ムジカホール

定員 293人(事前予約制)

主催 都城市教育委員会文化財課

基調講演・シンポジウム

「城郭が語る中世の都城盆地」

講師 城郭考古学者 千田嘉博氏

(名古屋市立大学高等教育員教授・奈良大学特別教授)

「都城」は、室町時代初期の永和元年(1375)に、北郷2代義久が築いたという、北郷氏歴代の居城である。都島(都島町)にある城ということから「みやこのじょう」と呼ばれ、現在の市名の由来となっている。

都城の範囲は本丸・中之城が当初の築城期に始まり、戦国期に西側へ拡張した。慶長期には伊集院氏による改築を受け、取添に巨大な空堀が作られた。市歴史資料館には、非常に精度の高い「竹之下都城御城図」が残されている。

本丸と九つの曲輪で構成される都城を「織田信長が始め、江戸期に完成を見た本丸、二の丸、三の丸と続く殿様ファーストの城と異なり、家臣も殿様に負けない力を持っていた時期の政治の仕組みを反映した城郭」と千田氏は指摘した。また、市民により親しまれる工夫として、当時の館を再現したり、樹木を伐採し構造を見やすくしたりした全国の事例を紹介した。

長年信長や秀吉の城を調査してきた千田先生ならではの楽しい講演が随所に垣間見えた。



「都城」築城650年記念歴史シンポジウム会場風景

「都城」築城650年記念歴史シンポジウム

シンポジウムパネリスト

尚、パネリストのお二人は当談話会の会員である。

「都城跡と宮崎の城」

竹中克繁氏(宮崎市教育委員会文化財課)

1. 宮崎の城 都城跡は、南九州独特の大型山城であり、山城には曲輪群が階段状になるものとそうでないタイプに分かれる。

2. なぞの多い南北朝期の城 都城の歴史は南北朝期に始まる。同時代の城である穆佐城は、「穆佐院政所」から「彼の城」へ、そして「穆佐城」へと変化し、誕生している。また、南北朝期の史料はあるが、以降遺物がない城、あるいは南北朝期の遺物はあるが、史料のない城郭があるという。その点都城跡はその両者があり、研究上貴重である。

(3. 関ヶ原の戦いと宮崎の戦いは省略)

4. 都城にしかない瓦 発掘出土品に朝鮮半島由来の李朝系瓦があり、格子目タタキをもつ、大変貴重なものである。

「都城盆地の中世城館と都城跡について」

栗畑光博氏(九州大学院比較社会文化研究院研究員)

1. 都城盆地の城館の分類と性格

市内の城館を立地・構造・規模によって4つに分類。

【A型】堀(溝)によって方形に区画されたもの。居館。

【B型】小規模な曲輪と土塁・空堀を配置。新宮城。

【C型】山地丘陵上に階段状に並ぶ曲輪と堀切。

【D型】ほぼ同じ面積・標高の複数並立する曲輪群と大きい空堀によって構成されるもの。拠点城郭、都城。

2. 都城跡について

拠点城郭としての都城跡は、盆地中央部に位置し、大淀川を望むシラス台地の先端部に構築された「南九州型」の典型例である。島津氏が日向国進出の拠点として確保した城郭である。

精緻な絵図や文献資料、良好な城郭遺構が現存しており、これらを総合的に検討することで、在地領主の居館からはじまり、大規模な軍事衝突が頻発する戦国時代の整備・拡充を経て、近世的要素が加わる最終段階までの詳細なプロセスを読み取ることができるであろう。その意味で、都城跡は貴重な歴史遺産である。

鹿児島県内の城郭関連報告書及び論文一覧（2016～2025年）

【埋蔵文化財発掘調査報告書・工事報告書他】

書名	編著者名	発行年
「鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画」	中桐造園設計研究所	2016年3月
「平成27年度市内遺跡確認調査報告書（敷領遺跡・新番所後遺跡・迫田遺跡・松尾城跡4）」	指宿市教育委員会	2016年3月
『鶴ヶ岡城跡 薩摩川内市埋蔵文化財発掘調査報告書（10）』	薩摩川内市教育委員会	2016年
「平成28年度市内遺跡確認調査報告書（宮之前遺跡・南摺ヶ浜遺跡・松尾城跡5）」	指宿市教育委員会	2017年3月
「太良城跡」林地荒廃対策事業（（治山工事）（菱刈南浦地内）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	伊佐市教育委員会	2017年3月
『恒吉城跡横堀跡』曾於市埋蔵文化財発掘調査報告書（26）	曾於市教育委員会	2017年
『出水麓遺跡（3）』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（26）	出水市教育委員会	2018年3月
「平成29年度市内遺跡確認調査報告書（大園原遺跡・松尾城跡6・その他市内遺跡）」	指宿市教育委員会	2018年3月
「虎居城跡－北薩広域公園整備事業に伴う埋蔵文化財センター発掘調査報告書－」	埋文センター	2018年3月
「市内遺跡（出水城跡他）発掘調査報告書－平成25～29年度の調査－」	出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（27） 出水市教育委員会	2019年3月
『本御内遺跡V』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（199）	県立埋蔵文化財センター	2019年
『恒吉御仮屋跡推定地』曾於市埋蔵文化財発掘調査報告書（34）	曾於市教育委員会	2019年
『内城址・上能野貝塚』西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書	西之表市教育委員会	2019年
「天然記念物及び史跡城山保存活用計画」	鹿児島市	2020年3月
「鹿児島（鶴丸）城跡－御楼門跡周辺－」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（205）／鶴丸城跡保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1	鹿児島県立埋蔵文化財センター	2020年3月
「恒吉城跡（追補改訂版）市内遺跡群発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（5）」 曾於市埋蔵文化財発掘調査報告書（36）	曾於市教育委員会	2020年3月
『春日堀遺跡1』鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター		2020年
『永利城跡』薩摩川内市埋蔵文化財発掘調査報告書	薩摩川内市	2020年
「鹿児島県指定史跡鶴丸城跡御楼門復元整備工事報告書」	鶴丸城御楼門建設協議会	2021年3月
「鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）－鹿児島第3合同庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」（221）	鹿児島県立埋蔵文化財センター	2021年3月
「鹿児島（鶴丸）城跡－総括報告書－（鹿児島市城山町ほか）」	鹿児島県立埋蔵文化財センター	2022年3月
「鹿児島（鶴丸）城跡－北御門跡周辺・御角櫓跡周辺・能舞台跡ほか－」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（214）／鶴丸城跡保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2	鹿児島県立埋蔵文化財センター	2022年3月
「上山城跡－令和2・3年度市内遺跡発掘調査事業－」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（90）		2022年6月
「2021年度の大口城跡の調査（四）」大口城を愛する会『南九州郷土研究』第34号		2022年10月
「鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）－鹿児島第3合同庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」（220）	鹿児島県立埋蔵文化財センター	2023年3月
『史跡城久遺跡保存活用計画書』	喜界町教育委員会	2023年3月
『北山遺跡1』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財センター発掘調査報告書（51）		2023年3月
『松尾城跡及び宗功寺跡』さつま町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）	さつま町教育委員会	2023年3月
『与論城跡 与論町埋蔵文化財発掘調査報告書（2）』	与論町教育委員会	2024年3月
「令和5年度市内遺跡発掘交差報告（敷領遺跡・松尾城跡・五郎ヶ岡遺跡）」	指宿市教育委員会	2024年3月

「新城跡（阿久根市山下）南九州西回り自動車道（阿久根川内道路）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」（59）

鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2025年3月

「鹿児島城二之丸跡－環境保健センター城山庁舎跡地文化財調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2025年3月

【特別展図録・刊行物他】

- 『鹿児島清水城』 「鹿児島清水城」編集委員会編 鹿児島清水城整備推進協議会 2019年2月
- 『絵葉書から分析する近世城郭の建築と空間』 高田徹 戎光祥出版 2020年8月
- 『黎明館企画特別展 鹿児島島の城館』 鹿児島県歴史・美術センター黎明館 2020年9月
- 『現代語訳 上井覚兼日記（天正十年十一月～天正十一年十一月）』 新名一仁 ヒムカ出版 2020年10月
- 『「鳥津の英主」貴久と日置の城館 薩摩統一への道のり』 令和三年度日置市吹上歴史民俗資料館企画展示図録
鳥津貴久没後四五〇年記念事業 日置市教育委員会・日置市吹上歴史民俗資料館編 2021年10月
- 『現代語訳 上井覚兼日記2（天正十二年正月～天正十二年十二月）』 新名一仁 ヒムカ出版 2021年11月
- 『ふもと まちあるきマップ 2022』 鹿児島大学工学部建築学科 鯉坂研究室・増留研究室 2022年2月
- 『現代語訳 上井覚兼日記3（天正十三年正月～天正十三年十二月）』 新名一仁 ヒムカ出版 2023年7月
- 『九州の名城を歩く 宮崎・鹿児島編』 岡寺 良・竹中克繁・吉本明弘編 吉川弘文館 2023年9月
- 鹿児島編では、次の35ヶ城が紹介されている。大口城・出水城・木牟礼城・虎居城・清色城・碓山城・鹿児島城・内城・清水城・東福寺城・串木野城・知覧城・穎娃城・市来本城・伊集院一字治城・伊作城・栗野城・国分新城・富隈城・蒲生城・岩剣城・建昌城・帖佐館・加治木城・加治木館・加瀬田ヶ城・下伊倉城・高山城・平松城・恒吉城・志布志城・赤尾木城・楠川城・与論城・赤木名城
- 「薩南諸島の中世城郭」 岡寺 良 『九州の名城を歩く』 吉川弘文館 2023年9月
- 『現代語訳 上井覚兼日記4（天正十四年正月～天正十四年十月）』 新名一仁 ヒムカ出版 2025年4月
- 『近世城郭の考古学』 中井均・加藤埋文編 高志書院 2025年6月

【論文・研究紀要・会報・雑誌他】

- 「史料紹介：成尾常矩「鹿児島城屋形及び周辺図」」 三木 靖
- 『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』第13集 鹿児島国際大学ミュージアム 2016年3月
- 「薩摩関白道の考古学的調査－安養寺陣跡と鳶ノ巣陣跡と関白道の調査」 新東晃一
（特集「鹿児島島の戦争遺跡」『鹿児島考古』第46号） 鹿児島県考古学会 2016年7月
- 『蘇る大隅国の実像－古代・中世の大隅半島部の歴史－』 鹿屋市教育委員会・隼人文化研究会・鹿児島地域史研究会
「古代・中世の大隅の集落・城館遺跡の変遷」 岩元康成・「鹿屋の古代～中世期の諸城址関連」 隈元信一・「楡井頼仲と日向・大隅」 大窪祥晃 2016年5月
- 「鹿児島城の地形・地質学的背景」 大木公彦 『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』第14集 2017年3月
- 『蘇る大隅国の実像－古代・中世の志布志湾西岸－』 東串良町教育委員会・隼人文化研究会・鹿児島地域史研究会
合同シンポジウム 発表資料 「下伊倉城跡の調査をめぐって」 中村和美 2017年
- 「古絵図等に見える鹿児島城」 三木 靖 『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告第15集』 2018年3月
- 特集「南九州における中世城郭研究の問題点」 『鹿児島考古』第48号 鹿児島県考古学会 2018年7月
- 「戦国期南九州の城郭 その特性を考える－九州拠点城郭の到達点より－」 上田 耕
- 「南九州地方の中世城郭に対する歴史的再評価」 宮武正登
- 「志布志城跡の遺構と後世の改変－近現代の耕作による内城大野久尾の改変」 大窪祥晃
- 「南九州中世城郭における虎居城跡」 黒木梨絵・永濱功治・浦 博司・本高謙治
- 「中九州拠点城郭の到達点－天正15年肥後国人一揆前後の城普請－」 鶴嶋俊彦

「北部九州拠点城郭の到達点」	岡寺 良	
「戦国期後半における大友領国の城郭-変遷とその到達点を探る-」	小柳和宏	
「薩摩藩の外城制度と麓集落」 矢野正浩 『地図情報』 38 (2)	地図情報センター編	2018年 8月
「シラス台地に築かれた謎の城郭群」 吉本明弘 『中世島津史研究の最前線-ここまでわかった「名門大名」の実像-』	新名一仁編 洋泉社	2018年 8月
「高田城(佐多城)の構成-縄張図を中心に-」 上田 耕 『薩南文化』 第10号	南九州市立図書館	2018年
「薩摩御城下絵図」 三木 靖 『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告第16集』	鹿児島国際大学ミュージアム	2019年 3月
「鹿児島城址のボーリング調査で見つかった貝化石層」 大木公彦・樽木孝利・黒川忠広 『鹿児島大学理学部紀要』 No.52		2019年
「与論城跡のこれまでとこれから」 南 勇輔 『奄美考古学会与論大会』	奄美考古学研究会	2019年
「大口城跡調査と関白秀吉薩摩侵攻の陣跡調査」 新東晃一 『南九州郷土研究』 第31号		2019年 6月
「日向と大隅の畝状堅堀」 鶴嶋俊彦 『第6回九州城郭研究大会資料集 九州畝状堅堀の様相と年代』		2019年
『日本遺産 薩摩の武士が生きた町~武家屋敷群「麓」を歩く~』 ガイド冊子 魅力発信推進協議会		2019年
「鹿児島城御楼門復元の意味するもの」 三木 靖 『国際ロータリー第2730地区ロータリーデー講演要旨』	鹿児島城西ロータリークラブ編	2020年 2月
「鹿児島城跡元禄以降の石垣について」 阿比留士朗 (『縄文の森から』 第12号)		2020年 3月
「鹿児島城御楼門の歴史性と復元の経過-御楼門の瓦葺き終了に際して-」 三木 靖		
『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告第17集』	鹿児島国際大学ミュージアム	2020年 3月
『九州の中世Ⅲ 戦国の城と館』 大庭康時・佐伯弘次・坪根伸也編	高志書院	2020年 4月
「菊池義武の拠点 隈本・八代」 青木勝士		
「天草衆の拠点」 中山 圭		
「宇土氏・名和氏の居城 中世宇土城跡」 藤本貴仁		
「合志郡の領主 竹迫氏・合志氏の拠点 竹迫城」 米村 大		
「戦国期の九州南部」 新名一仁		
「都城跡 島津氏の日向国進出の拠点」 栗畑光博、近沢恒典		
「伊東氏の本拠 都於郡城跡」 蓑方政幾		
「高城合戦の城郭群」 白岩 修		
「日向「三城」から考える中世山城の関係性」 堀田孝博		
「延岡周辺の城郭」 甲斐典明・「宮崎平野の城郭」 竹中克繁		
「島津氏の本拠とその景観」 吉留正樹		
「知覧城周辺の歴史的景観」 上田 耕		
「明らかになる与論城跡発表資料集」 与論町・鹿児島県		2020年12月
「鹿児島県における中世城館研究」 下鶴 弘 (特集「鹿児島県考古学会70年の歩み」)		
	『鹿児島考古』 第50号 鹿児島県考古学会	2021年 3月
「鹿児島城築城と御楼門-上山城と鹿児島城の歩みに探る-」 三木 靖		
『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』 第18集		2021年 3月
「鹿児島城本丸石垣における石材加工と石積み技術の変遷」 濱田晋一・櫃本 聡子・麓和善		
『日本建築学会計画系論文集』 第86巻 第785号		2021年 7月
「鹿児島城跡元禄以降の石垣について (2)」 阿比留士朗 (『縄文の森から』 第13号)		2021年 3月
「大口城跡の調査 (三) 2020年度の調査」 大口城を愛する会 『南九州郷土研究』 33		2021年
「串木野城と島津家久-串木野城の地名「せかい」をめぐる」 寺田 緑 『くしきの』 35号		
	いちき串木野市郷土史研究会	2021年

- 「鹿児島県の城と鹿児島城－史料にみる城－」 三木 靖 『REIMEI黎明』39－1
鹿児島県歴史・美術センター黎明館 2021年
- 「近世鹿児島城下町についての考察」 阿比留士朗 (『縄文の森から』第14号) 2022年3月
- 「南九州の古道について3」上村俊洋 『黎明館調査研究報告』第34集 鹿児島県歴史・美術センター黎明館 2022年
- 「鹿児島城の面影をたどる」 三木 靖 『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』第19集 2022年3月
- 「史料と微地形からみた近世前期の鹿児島城下町の地形環境」『鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」(90)25-43』
小林善仁・森脇広 2023年2月
- 「鹿児島城跡出土の記銘陶磁器の種類と性格」 渡辺芳郎 『金沢大学考古学紀要』44号(佐々木達也先生喜寿記念号、
中村慎一先生・中村誠一先生退職記念号) 金沢大学古代文明・文化資源研究所 2023年2月
- 「近世鹿児島城下町の能舞台について－鹿児島城跡で確認された能舞台跡を中心に－」 西野元勝
『黎明館調査研究報告』第35集 鹿児島県歴史・美術センター黎明館 2023年3月
- 「鹿児島城跡出土の記銘陶磁器の種類と性格」 渡辺芳郎 『金沢大学考古学紀要』44 2023年3月
- 「鹿児島城における陶磁器の購入・管理形態－鹿児島城二之丸跡E地点出土の記銘資料を手がかりとして－」
渡辺芳郎 『大橋康二先生喜寿記念論文集 陶磁器と考古学』大橋康二先生喜寿記念論文集編集委員会編 2023年5月
- 「霧島市上井城跡の踏査」 黒川忠広 (『縄文の森から』第16号) 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2023年11月
- 「鹿児島城をめぐる」三木 靖 『城郭史研究 第42号』 日本城郭史学会 2023年12月
- 「文化財レポート 鹿児島城跡の調査成果」黒川忠広・西野元勝 『日本歴史』2024年2月号 吉川弘文館
- 「特集 三木 靖先生を偲ぶ」 『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』第21集 2024年3月
- 「令和5年度企画展「中世前期の領主居館」」 上村俊洋 『黎明館調査研究報告』第36集 2024年3月
- 「薩摩守護所についての試論－鎌倉・南北朝期初頭頃を中心に－」 吉本明弘
『千台』第52号 薩摩川内郷土史研究会 2024年3月
- 「南九州城郭談話会発足のころ」 上田 耕 『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』第21集 2024年3月
- 「鹿児島城跡(吉野堀)出土の近代泉州谷川瓦－近代瓦の広域流通の一端」 西野元勝 『黎明館調査研究報告』
第36集 鹿児島県歴史・美術センター黎明館 2024年3月
- 「鹿児島県内の城郭調査研究の動向－平松城・北村城・上井城・出水城跡から－」 上田耕
『北部九州中近世城郭研究会資料集』第24集 北部九州中近世城郭研究会・白石町 2024年11月
- 「鹿児島県内の城郭調査研究の動向－平松城・北村城・上井城・出水城跡から－」『北部九州中近世城郭研究会
研究大会資料集第24集』 上田 耕 北部九州中近世城郭研究会・白石町 2024年11月
- 『南九州城郭研究 第4号 三木先生追悼文集』 南九州城郭談話会 2024年12月
- 『2021～2024年度科学研究費補助金(基盤研究C)成果報告書(課題番号:21K00973)
近世鹿児島城下町の歴史考古学的基礎研究』 渡辺芳郎編集(太田秀春・小林善仁・丹羽謙治・森脇広) 2025年2月
- 「近世鹿児島の城下町絵図に関する基礎的研究」 小林善仁・「鹿児島城、御楼門櫓形内部の石垣にみられる窪みの形成」 森脇 広・
「鹿児島城下における異国表象とその展開－朝鮮の役を中心に－」太田秀春・「鹿児島城跡および城下町出土の壱野窯製品－白薩摩・
宋胡録写・象嵌製品を中心に－」渡辺芳郎・「名山楼について」 「翻刻『上下武者踊之記』」丹羽謙治
- 「鹿児島城下で出土した琉球諸島産の赤瓦について」西野元勝 『黎明館調査研究報告』37、鹿児島県歴史・美術センタ
ー黎明館 2025年3月
- 『鹿児島考古』第54号 鹿児島県考古学会 2025年3月
- 「出水城研究の最新成果」 岩崎新輔 (特集1「北薩地区の発掘調査・遺跡整備の近況」)
展望「三木靖先生、南九州中世城郭、考古学の成果に期待－鹿児島県の城の解明に情熱を注ぐ－」 上田 耕
- 「驚きの与論城跡シンポジウム記録集:令和6年度地域の特色ある埋蔵文化財活用事業関連シンポジウム」
与論町教育委員会 2025年

「近世薩摩藩内の『中世の城』－国絵図・郷絵図を中心に－」 吉本明弘

『プロジェクト研究報告集』No22 鹿児島大学大学院人文社会科学部地域政策科学専攻

2025年3月

『第41回 全国城郭研究者セミナー 戦争からみる城郭と交通路』

中世城郭研究会

2025年8月

「欧州に紹介された城－南薩の街道を取り込んだ堅固な要害 額娃城跡－」 上田 耕

「宮崎県穆佐城址－280年の歴史を持つ南九州の中世山城」 竹中克繁

【会報 南九州の城郭】 南九州城郭談話会

『第37号』 2016年2月

「天堂ヶ尾関白陣の再検討」新東晃一、「清色城跡見学会・例会・総会報告」、「穆佐城跡見学会・例会報告」、

『第38号』 2016年5月

「蒲生の松坂城跡について」下鶴 弘、「平佐にみる、歴史を活かした祭り」大籠洋一、「天草の山城跡見学会」

『第39号』 2017年3月

「鹿児島（鶴丸）城跡の発掘調査成果」西野元勝、「鶴ヶ岡城跡の発掘調査報告」米森裕太、「出水城跡見学会」、

『第40号』 2017年12月

「山門院合戦と相良氏の出兵」鶴嶋俊彦、「帖佐島津義弘居館跡と帖佐地頭仮屋跡について」下鶴 弘、

「高田城（佐多城）跡の構成－縄張図を中心に－」上田 耕、「志布志城跡の発掘調査報告」大窪祥晃、「国史跡穆佐城跡主郭等復元整備基本設計の概要」竹中克繁、

『第41号』 2019年3月

「上津浦城跡の発掘調査成果について」中山 圭、「加治木城跡の概要について」下鶴 弘、「宮崎市佐土原歴史資料館企画展「戦国時代の佐土原」の概要」花田想乃香、

『第42号』 2024年1月

「曾於市末吉町の平松城について」橋口卓也、「蒲生の北村城について」下鶴 弘、「ミュージアム知覧 南九州市知覧麓日本遺産認定記念企画展 山城から麓へ」上田 耕、「佐土原城跡見学会・例会報告」、

『第43号』 2025年5月

「大島郡与論町の与論城跡について」南 勇輔、「霧島市清水城跡について」黒川忠広、「岩剣合戦における「狩集陣跡」について」下鶴 弘、「五味克夫先生城郭関連論文一覧」、「龍虎城跡・猫城跡見学会報告」。

『第44号』 2026年3月

「霧島市廻城跡について」黒川 忠弘、「鹿児島県内の城郭関連報告書及び論文一覧（2016～2025）」

「鍋城跡と相良頼景館跡見学会例会」「境田城跡見学会」「狩集陣跡見学会」他。

見学会・例会報告

第69回見学会

「鍋城跡と相良頼景館跡」

日時 令和7年2月24日(月) 10時～12時

集合場所 多良木町交流館石倉駐車場

熊本県球磨郡多良木町1648番地

案内者 鶴嶋俊彦・永井孝宏(多良木町教委)

見学会 参加者15名

大字黒肥地にある鍋城跡は、比高差約60mある。南側から登城し、本丸跡を抜け寺跡手前から西へ下山した。北側尾根は逆Y字型の古い宝塔を思わせる。向かって左裾に寺跡がある。堀切を経て南へ広い城郭群が続く。南部の先端部は小さな曲輪が密集して防御性を高めていると思えた。

相良頼景館跡は、大字黒肥地にある鎌倉時代から機能した平地居館跡である。多良木相良氏が開発したとされる灌漑域に占地し、当初は堀により方形に区画され、球磨川に面し石積を整備した遺跡であった。

第55回例会

参加者15名

○「多良木相良氏の城館について」 鶴嶋 俊彦

○「発掘調査からみた相良頼景館跡について」

永井 孝宏

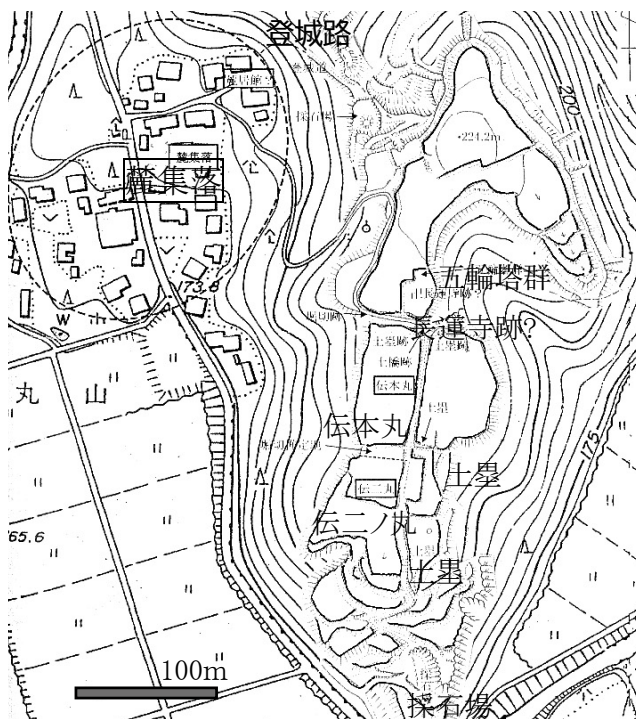


図1 鍋城跡縄張り図

第70回見学会

「境田城跡(さつま町求名)」

日時 令和7年6月29日(日)

集合場所 境田自治公民館

案内者 末原光浩・大籠洋一他

見学会 参加者約20名

境田城は境田氏の居城。「薩摩境田城調査会」をはじめ地域の先人たちが調査・保存をしてきた歴史遺産である。図2のとおり、東西に複数の空堀を設けるが、まだ全体像がつかめていない。タイプとしては鹿屋の大始良城跡周辺の立地に類似点がある。

「スヌケダ」曲輪の「スヌケ」は蚕の脱皮の意であり、もとは「素脱田」であろう。尾根に沿った田も細長く城名の地名由来となっている。

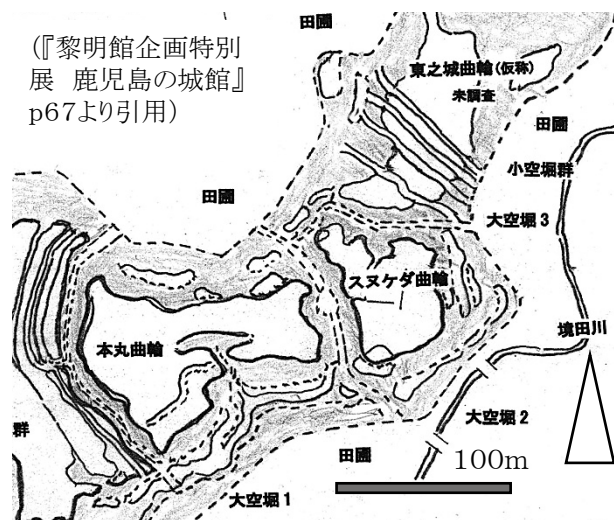


図2 薩摩国境田城縄張図稿(三木作図)



国土地理院空中写真「境田城跡」 1960年代

第56回例会

発表題名と発表者

○「関白陣跡について」 新東 晃一

○「阿久根市新城跡と隣接遺跡の紹介」 黒川 忠広

○「境田城跡周辺の特徴的地形について」 下鶴 弘

第71回見学会

「狩集陣跡」

(始良市平松字城瀬)

日時 令和7年12月15日(日) 10時～12時

集合場所 重富公園駐車場(イケダパン工場隣)

案内者 下鶴 弘(始良市歴史民俗資料館)

見学会 14名

狩集陣跡の見学会は、令和元年12月22日に一度計画されたが、当日雨天のため登城を断念した経緯があった。今回は万難を排して事前に草払いを実施し、旧坂の切岸にロープを張り巡らして再挑戦した。

さすがに最後の切岸にはみな閉口したが、ロープを頼りになんとか無事に山頂へたどり着いた。

主郭の曲輪1は略コマ形に土塁をめぐらし、中は自然地形に沿って三段に分かれていた。主郭の長さは約300メートル弱である。野首は土橋状に尾根へ延びていた。山頂は始良市が所有する経済林であり、杉が植林されている。標高は250メートルあり、敵対する岩剣城(標高220m)よりも高く敵情を監視できる位置にある。



図1 狩集陣跡と岩剣城の位置関係図



写真1 登頂記念写真

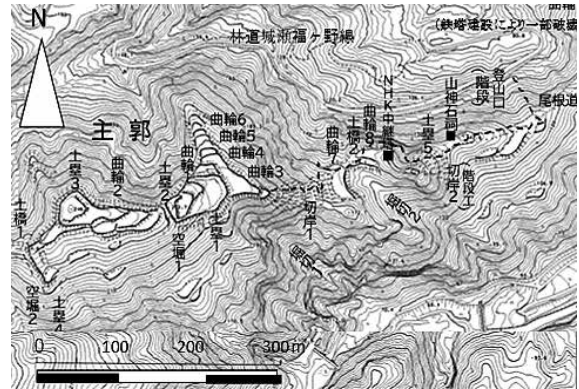


図2 狩集陣跡実測平面図

役員交代のお知らせ

令和7年6月29日の総会により、新東会長が退任し顧問へ就任し、会長には幹事の下鶴が就任しました。それ以外は変更なし(任期は令和8年3月31日まで)

1. 会長 下鶴 弘
2. 副会長 上田 耕
3. 幹事 吉本 明弘・大籠 洋一(鹿児島県)
鶴嶋 俊彦(熊本県)
桑畑 光博・吉本 正典(宮崎県)
4. 事務局長 有川 孝行
5. 会計 下鶴 弘
6. 監査 重久 淳一・黒川 忠広
7. 顧問 新東 晃一

編集後記

○廻城跡については、これまで見学会の機会がなかったため、是非将来実現したいものである。

○論文一覧については、過去10年分を掲載したので、4頁に及んだ。原稿作成に活用していただきたい。

熊本・宮崎両県の関係論文は次の機会に紹介したい。

○当談話会の公式ホームページを昨年末から公開しているため、ぜひ閲覧ください。

★アドレス：<https://yamajiro.org/>

(または「南九州城郭談話会」で検索してください。)

南九州の城郭 第44号

発行者 会長 下鶴 弘
発行所 鹿児島県始良市東餅田498番地
始良市歴史民俗資料館気付
南九州城郭談話会事務局
編集者 下鶴 弘
印刷所 文進社印刷株式会社